南京木屑（ナンジンムーシエ）5

授業は楽、かつ難しい

菊埼　威

三〇二人の学生を担当

今学期の担当は、語言文化学院二年一、二班の作文が各一コマ、三年一、二班合同の日本文学史が一コマ、濱江学院日語科三年二班の作文一コマ、四年一、二班合同および三班の高級日語（精読）各四コマ、計八コマ十六時間だ。担当学生数は三〇二人である。昨年は腰痛のため、無理を言って十二時間に減らしてもらい、後期も一コマ閉講で十四時間になり、比較的楽をさせてもらったが、今期はそうもいかない。日本人教師が一人増えて四人になったものの、学生数も増えたようで、みんな大変だ。僕自身は、慣れもあるが、昨年のつらい思いに比べれば、実に楽な毎日だ。

作文も精読も一部教材が新しくなったが、昨年の経験が余裕を生んでいる。とはいっても、平板な授業にならぬように、また彼らを受け身にしないように工夫しなければならない。作品中のわずかな言葉遣いに注意を払ったり、日本や日本文化に関わるようなことに目をつけ、できるだけ興味を引くような説明ができるかどうかが重要だ。

苦労するのは文学史で、中国人の手になる教科書はあるが、幾つか間違いがあるので注意しなければならず、また概説だけではつまらないから、作品の一部を印刷し紹介しているが、そのための資料作りが大変だ。さらに古典文法も教えてほしいとの無茶な要請もあり、おまけにこれらを今学期中に終了させなければならず、

先が思いやられる。一回目は挨拶と上古文学の概説、二回目は万葉を中心とした上古の作品鑑賞、三回目は中古の概説と『竹取物語』と『伊勢物語』の紹介をした。連休が明けたら、『源氏物語』や『枕草子』などの女流文学を紹介し、さらに古典文法を始めよう。

論文の添削に骨を折る

語言文化学院の三年、および濱江学院の四年は昨年度も教えた学生たちだ。互いに気心が通じ合う者が何人かいる。今学期もメールをくれたり、話しかけてくれたり、遊びにも来てくれた。

さっそく、学年論文の添削依頼もあった。映画監督の夢を抱いている濱江国際商務四年の男子が映画論を書いてきた。なかなか骨のある論文だが、添削にはそれこそ骨を折った。明治期の道徳教育を論じた同じクラスの男子学生は、武士道徳や儒教道徳が絶対主義的天皇制のもと「教育勅語」となり、人民を戦争へと駆り立てていったと断罪した。彼は鹿野政直氏の『日本の近代思想』や田中彰氏の『明治維新と西洋文明』など明治期の政治思想や自由民権運動などについて著作を数冊読破しての力作であった。

また、『人民中国』という雑誌の論文コンクールに応募するという作品の添削依頼も六人あった。最優秀者には日本旅行、優秀者には数千元の賞金が出るという。本部の三年生は全員応募せよと担任がはっぱをかけたらしい(後日譚。十一月二十四日、「先生、優等賞に入った」と一人から喜びの電話があった)。

学生と家計とアルバイト

夏休みの間に、悲劇が二件あった。濱江四年の女子学生が、ある日の宿題に「大事があった」と書いてあったので聞いたところ、長江で荷物運搬をしている父の船が沈没し、幸い、父はじめ乗員は助かり、船も引き上げられたものの、とにかく大損害を蒙ったらしい。保険は?と聞いたら、積載量オーバーでおりないという。家計を少しでも助けるため、彼女は、夏休みもこの連休もアルバイトをして頑張っている。

本部の三年のある学生が左肩に「孝」の字の喪章をつけて授業に出ていた。休み中に父が亡くなったと聞いた。母は継母で折り合いが悪く、財産分与など将来のことで困っているらしい。今年の四月に卒業を前にして自殺した学生がいたが、その学生は継母とうまくいか

ず、進路のことでも悩んでいたことを思い出した。「元気を出すんだよ」とその場では言い、後で励ましのメールを送った。彼女は「先生、ご安心ください。私は必ず元気になります。ただ、ちょっと時間が必要です。私は自分が強いということを信じています。頑張ります」とけなげな返事がきた。しっかりした学生だから、きっと以前のように明るい笑顔を見せてくれるだろう。

家計を助けるため、夏休みをアルバイトで過ごした者もいる。職種はスーパーのレジや売り子、食堂の店員などが多いが、あまり待遇はよくない。人気の職種は家庭教師や会社や学校の電話番などの事務職だ。現在も二人の小学生の家庭教師をしている学生は、土日で合わせて九時間教え、九十元、月四週で三六〇元を手にしている。中学生は一時間十五元くらい。もちろんもっと高額を払う親もいるそうだ。彼女の場合は、そのほかに大学の事務のアルバイトもし、生活費を稼いでいる。仕送りなし。「親が苦労しているから、当然です。農民である両親を尊敬している。貧しいが、お金より大切なものをくれた。自分の力で幸せを求める心だ。だから、私は疲れても学ぶべき知識は全部学ぶように必死で頑張ります」という。

奨学金は国からのものが、最高額は八千元で、家庭の経済状態によっていくつかにランク分けされているようだ。昨年は日語科で上記の彼女と他に一人が八千元と五千元をもらった。いずれも成績優秀であることが条件で、上位者五人から十人までがその対象者となるらしい。ほかに学長奨学金というのがあり、これは家計に関係なく成績優秀者に与えられる。最優秀者は二千元、以下千元が五人、八百元が十人、五百元が十人となっていく。最優秀者が国の奨学金に該当すれば、二番手が繰り上がって二千元をもらえる仕組みだ。昨年、本部の三年生で首席の学生が家庭奨学金をもらったため、首席奨学生の地位が空き、そこへ二番の学生が滑り込んだ。いずれも専門単位なので奨学生は多くいる。何にしろ本部の学費は、寮費千五百元を含んで八千元弱（各学年の基本額があり、選択科目数により増える）だから、実に大きな額だ。ちなみに濱江学院の学費は、同額の寮費のほかに約一万三千元必要である。

読書会が成功

第二週の九月一八日に、以前から温めていた読書会を開いた。彼らの日本語学習に必要なのは多くの優れ

た文章や多様な文章に接することだと考え、いろいろ想を練っていたのだが、僕の負担がさほど重くなく、かつ楽しめるもの、授業とは別にリラックスして自由に学べるものとして読書会を考えた。授業担当の本部の三年生と濱江の四年生にのみ案内した。日本の小説を読むのだと案内した当初は、かなり多くの学生が反応した。あまり多いのも困るし、さりとて少ないのもさびしいとあれこれ心配したが、当日は二十六人の参加だった。

最初の作品は、芥川龍之介の『羅生門』とした。内容でも用語の点でもそう難しくはなく、適度な長さであり、何より謎がたくさん仕掛けてあり、作者と知恵比べをするおもしろさがある。

夕食を終わって、六時十五分頃、教室に行くと鄭芳（ジョン・ファン）らなじみの学生がすでに十人ほど、にこにこして待っていた。六時半開始。まず僕が通して読み、その後一段落ごとに指名読み、解説という順序ですすめた。もっぱら一方通行だったが、生き生きと聞いていた。作品の力だ。

二回目は翌週の二十四日、互いに話し合いながらの読書会にするため、会議室を借りた。二十五人が参加した。

前回と異なり、僕は問いかけに終始した。読みも指名することなく読み手がどんどん現れ、発言も積極的であった。最後のテーマを考えた時の陳燈（チェン・チェン）の発言は良かった。この日は田紹美（ティエン・シャオメイ）先生も参加したのだが、帰りがけに「おもしろいですね。文学に興味を持った。文学青年になろうかな」などと言ってくれた。翌日、孟杭（モン・ハン）が「一人で読んでいたのでは分からないことが、先生のおかげでいろんなことが分かった。おもしろかった」とメールをくれた。とにかく、一応の成功だ。次回からは彼らの自主性がもっと発揮できるように工夫しよう。次は『走れメロス』だ。

（つづく）